

## E フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーの技術論——『技術の完成』を中心に

世話人：桐原隆弘（下関市立大学）

報告者：今井敦（龍谷大学・非会員）・中島邦雄（水産大学校（名）・非会員）・桐原隆弘

討論者：山本與志隆（愛媛大学・非会員）

本セッションでは、2018年10月に翻訳出版されたF・G・ユンガー（Friedrich Georg Jünger, 1898-1977）の主著『技術の完成』（人文書院、原著；Perfektion der Technik, 初版1946年、第8版2010年）の技術論を検討した。

### 1. 報告概要

報告者今井は、F・G・ユンガーの略歴と『技術の完成』の概要、とくに兄エルンスト・ユンガーの『労働者 支配と形態』などとの関連と、マルティン・ハイデガーの『技術への問い』に与えたとされる影響について解説した。技術は富を生み出すか、またそれは労働量を減らすか、という問いに対し、F・G・ユンガーは否定的な回答を与える。技術は自然や人間の内に利用可能性を見出し、これらを機械や組織に組み込み消費して、本来とっておくべき「原資（Substanz）」をも蕩尽するのであり、さらに、生産過程で導入される自動機械は労働者を機械の手足とし、これを補助する単純でいびつな作業に従事させ、収奪（Raubbau）を加速度的に増大させるからだという。彼の技術観は、技術を労働者による世界支配の媒体として肯定的に捉えようとするエルンストとは対照的であるが、同時に、技術による総動員（die totale Mobilmachung）という思想をエルンストから受け継いでもいる。一方、ハイデガーは1942年にVittorio Klostermannを介してF・G・ユンガーと知り合い、すでに1939年夏に書き上げたと言われる『技術の完成』のゲラ刷りを読んでおり、相手の制圧を目指す技術の権力志向、戦争や破壊との結び付き、機械の法則性が制御不能であるといった認識は、Daniel Moratの研究などが示す通り、ユンガー兄弟とハイデガーが共有するところである。

つぎに報告者中島は、『技術の完成』のエコロジー思想の側面について解説した。技術装備の完成度の高まりやモータリゼーションによって資源枯渇・労働収奪・環境破壊が進行しているということは、すでにユンガーも指摘していた。彼は、原資の維持・保護を前提とする秩序ある経済と収奪を旨とする技術的合理性との違いを指摘し、かつ「存在としての富」と「所有としての富」、生命有機体固有の「生きた時間」と均質で分割可能な「死んだ時間」それぞれの区別に基づいて、「デメーテルの大地」への信頼に満ち「生きた時間」の流れる田園風景を「存在としての富」の典型として捉える。これらの点から、『技術の完成』には文学の立場からのエコロジーへの寄与が見られるとした。

最後に報告者桐原は、ユンガーの思想を社会思想史の文脈から位置付けるという問題意識から、ユンガーの経済思想、自然観そして歴史哲学の側面を、カール・マルクスと比較

しつと明らかにしようと試みた。自然観については、歴史の過程で歪められた社会関係において喪われた自然（人間的自然を含む）を回復するというモチーフをユンガーはマルクスと共有するが、その一方で、ユンガーは自然を人間の経済活動にとっての存在論的基盤であり、生産活動の限界を内包していると捉えるのに対し、マルクスは自然を人間の類としての自己実現の手段と見なしている。また、経済思想の面からは、ユンガーは私的領域の砦として私有財産をハンナ・アーレントと同様に擁護するが、彼にとって重要であるのは私的所有や社会主義の問題よりもむしろ、（中島の報告でも述べられているように）技術性に対する採算性の優位、所有としての富と存在としての富との対比などに見られる経済存在論である。この点、自然との物質代謝を人間性の観点から適正化すること、および所有と人間存在の転倒状態の克服を念頭に置いていたマルクスと共通の志向をユンガーには読み取ることができる。さらに、歴史哲学的観点からは、ユンガーは人類史が技術文明によって「自然からの頹落」に至るという側面を強調するのに対し、マルクスは歴史過程における「自然の実現」を念頭に置いており、前者にはギリシア的・運命論的歴史観が、後者には終末論的・救済史的側面が色濃くみられると指摘した。

## 2. 質疑応答

以上3名の報告に対し、討論者山本氏が質問を行った。今井の報告については、「総動員／総流動化」の思想がユンガー兄弟の技術理解の根底にあり、それがハイデガーの「総・かりたて体制（Ge-stell）」に継承されていることが明確にされていると指摘したうえで、技術批判の先に見出されるものは何か、またF・G・ユンガーの「新しいナショナリズム」と技術的合理性批判との整合性はいかほどか、という点について質問された。中島の報告については、ユンガーがデメテルの大地への信頼を語る点において、土着性の喪失に直面する中、大地に根ざすことの回復を求めるハイデガーの思惟との共通性がみられるとしたうえで、デメテルの大地は神によって統べられている以上、人間の作為がどれほど及ぶものなのか、また現代技術の諸問題に対してユンガーの思惟から何を学ぶことができるのか、という点について質問された。桐原の報告については、ユンガー経済思想における「採算性」と技術的合理性との親和性から、経済は結局のところ技術に屈服するほかはないのではないか、また、ユンガーが想定していると考えられる「持続可能な発展」は量的なものではなく質的なものであるとして、いかなる「質」、いかなる「発展」が目指されるべきなのか、さらに、ハイデガーにおける根源的な存在の真理の立ち現れとしてのギリシア的思惟の位置付けに鑑みて、ユンガーにおける歴史の始まりとしての古代ギリシアの意義はどのようなものであったのか、という点について質問された。

（今井回答）F・G・ユンガーは『技術の完成』を診断書として構想しており、すぐ使えるような治療法を示そうとしたものではないと断っている。それでもところどころに読みとれるユンガーの解決策とは、まず問題を認識すること、そして新しい思考である。技術

によってすべての問題が解決できるという幻想を捨てること、技術がもたらした危機、すなわち、合目的機能主義が人間と自然を同じように使い捨てにしていくということ、それが権力への意志の帰結であるという事実を認識すること、これが第一であり、『技術の完成』もそのために書かれたものであろう。また、彼は『技術の完成』第二書の『機械と財産』を締めくくる際、「地球は世話人としての、また牧人としての人間を必要としている」と述べている。これは、支配ではなく、生成のなりゆきを見守り、循環的営みの維持に努めるべきだという主張である。ハイデガーが述べた「存在の牧人」という言葉を想起させるが、ユンガーの場合には、本来の経済的姿勢に立ち返ること、すなわち地球の面倒を見、世話することによって生活の糧を創出していくこと、すなわち、「人間がこの地球に住まうこと」を意味している。人が大地とのこうした互恵的關係を築くことはまた、物や事柄をそのもの自体として受けとめること、その独自性に立ち返って眺めることを前提としている。

ユンガー兄弟が1920年代に唱えた「新しいナショナリズム」は多くの矛盾を孕んでおり、彼らがどの程度真剣にドイツのヘゲモニーを目標としていたのか、大きな疑問符がつくところである。弟のユンガーが技術批判を鮮明にするのは、彼ら兄弟がナチズムに直面してこれを拒否し（1930年ごろと思われる）、ナショナリズムそのものからも距離を取るようになった時期と重なっている。F・G・ユンガーの技術批判はファシズム批判という側面も持っている。第一にそれは、技術的組織によって国家の成員がみな機能と化してしまうとする批判に表れている。皆が命令を機械的に実行し、無感覚・無感情に自らの役割を果たしてだけであり、目の前の事柄を自分に関わる事柄として扱おうとしない、責任をとろうとしない、そのような機構の中で搾取が進められ、支配が進められる。F・G・ユンガーはこの意味で、ファシズムを技術の完成の一現象として、技術的進歩の帰結としてとらえていたが、この点がまた、彼の技術論に対し、それがナチズムの犯罪、特にホロコーストの特殊性から目をそむけ、技術的進歩がもたらす合理的残虐性の一現象として相対化しているという批判がなされるゆえんでもある。

（中島回答）デメーテルの大地は人為の及ばないものかどうかについては、デメーテルの属性自体にすでに人為が含まれていることが重要である。つまり彼女は農耕と豊穰、特に麦の生育を司る神であり、デメーテルの大地は農耕と牧畜を通じて人間と自然との交流の場になっているのである。（ユンガーによれば、人間の機械とのつきあいが「死んだ時間」と機械への隷属をもたらすのに対して、自然とのつきあいは「生きた時間」と「存在としての富」をもたらす。）また、現代技術の問題についてユンガーから学ぶべきこととしては、エコロジーの問題を考えるうえで、彼の技術論が非常に役立つということである。彼の技術論の描くディストピアは実現するようには思えないが、彼の指摘する、経済性を度外視した技術者の「力への意志」は現在も強く存在し、それによってさまざまな環境問題が惹き起こされている。彼の技術論はまさにそれを指摘しているのであって、したがってこう

した指摘が、他にもない現在の環境問題の根本的な発生理由を早い段階で言い当てる結果にもなっている。

(桐原回答) 経済思想については、技術(技術者)が資源・エネルギー投入量に対する仕事量の最大化を目指す中、大工業における人間労働の機械への従属や、採算を度外視した技術的合理性の貫徹、さらには自然と人間の収奪といった(マルクスもすでに指摘していた)技術文明の行きつく先に直面して、ユンガーはそもそも原資(Substanz)の維持と保護(erhalten und schonen)を行わない以上、利益そのものが持続的には得られないという基本的事実を端的に指摘した。その意味で本来の経済原理による技術原理の克服・統制は原理的に可能であるとユンガーは考えていたと思われる。また、発展の「質」の問題については、「有為な労働はゆとり(Muße; 余暇)から生まれる」というユンガーの思想を軸として、富(存在=自由/所有)、時間(「生きた時間」における質の充実)、実用的知識に対する全人的教養の再評価、といった諸観点を経済存在論へと再構成することからこの問いに的確に答えることができるだろう。さらに歴史観については、Daniel Morat が指摘するように、プロメテウス(“technisch”、意志・発展)とミューズ/アポロ(“musisch”、理性・調和)との対立が終始F・G・ユンガーの重要なモチーフを成していること、またE・ユンガーが戦後キリスト教に傾斜していったのに対し、F・G・ユンガーにとっては終生ギリシア文化が重要な足掛かりであり続け、その意味で兄よりもむしろハイデガーとの親和性が強いとの指摘などからも、本発表での技術文明の「墮落史観」「運命史観」という見方が、ギリシア的思惟からF・G・ユンガーが得た歴史観として裏付けられると思われる。

### 3. その他

フロアからも複数の方から『技術の完成』翻訳の経緯、マルクスとの共通性、「テクノクラート官僚制」論との異同、などについてご質問をいただき、活発な議論が交わされた。参加者は(発表者・討論者を除いて)16名であった。